

『13歳からのテロ問題』

(かがわ出版、2011年)

加藤 朗

2001年の9.11同時多発テロが起きてすでに10年が経過した。同時多発テロは国際政治に影響を与えただけではない。むしろより本質的な哲学、思想、倫理などに深刻な問題を投げかけた。なぜイスラムは西洋を目の仇にするのか、異文化との共生は不可能なのか。宗教や大義のためにテロは許されるのか。イラク戦争に正義はあるのか。私たちはいまだにこれらの問題に何一つ決定的な回答を見出すことができない。むしろ問題は深まるばかりだ。

私がテロ問題を研究し始めたのは、同時多発テロよりさらに20年以上も前に遡る。当時は冷戦を背景に中東でパレスチナ解放戦線によるテロが横行しており、テロ問題とは国際安全保障なかんずく米ソ冷戦の問題であった。しかし、冷戦の終焉後、代わってイスラムによるテロが猖獗を極め、テロ問題は宗教対立、文明対立等思想や倫理の問題となった。もはやテロを安全保障の問題としてのみ語ることはできない。

こうして同時多発テロ以来、テロ問題に関する私の関心は否応なく哲学、思想、倫理に向かって行った。折も折、偶然、かがわ出版の企画で和光中学の3年生の有志の生徒にテロ問題を教える機会を得た。同時多発テロが起きた時彼らは4～5歳で、同事件についてはほとんど何も知らない。ましてや冷戦は完全に歴史上の出来事だ。同時多発テロや冷戦について何も知らない中学生にどのようにしてテロ問題を教えれば良いのか。悩みに悩んだ末に、関心を抱いていた哲学、思想、倫理の問題としてテロ問題を教えることにした。

放課後を利用して前後2回、各2時間、合計4時間の授業を行った。後書きにも記したが、最初はどうのように授業を進めれば良いのか、皆目検討もつかなかった。マイケル・サンデルの「正義論」の講義を真似てさっそうと授業を進める、というわけにも行かなかった。なにしろ相手は大学生ではなく中学生である。また『14歳からの哲学』の池田晶子のように、簡単な言葉でわかりやすく哲学、思想を語る技を残念ながら私は持ち合わせてはいない。さらに加藤陽子の『それでも、「日本人」は戦争を選んだ』ほど、テロ問題は中学生になじみのあるテーマではなかった。生徒たちは教科書だけでなく漫画やゲーム、テレビなどさまざまな媒体を通じて太平洋戦争の知識を得ているが、テロ問題については9.11陰謀論くらいしか知らない。どうすればテロ問題について生徒たちに理解してもらえるか悩みはつきなかった。

しかし、全ては杞憂だった。生徒たちは知識ではなく感性や論理で、私の予想以上にテロ問題について熱心に討議してくれた。私が投げかけた問いに生徒たちは即座に答え、そ

の答えに私も直ちに新たな問いを發した。生徒との言葉の応答は、テニスや卓球のラリーの応酬のように、息をつく間など全くなかった。「命よりも尊いものはあるか」、「目的が正しければ暴力は許されるか」など普通なら返答に窮するような問いを投げかけても、生徒たちは懸命にまっすぐに打ち返してくる。相手が中学生だからといって手加減をすることもなく、言葉のラリーを続けた。2時間の授業が終わると疲労困憊であったが、実に爽快で達成感に満たされた。それは教育が、教師と生徒が共に育つ「共育」であることを思い知らされた授業であった。

授業は、「1時間目 テロとは何か」、「2時間目 テロはなぜ起こる」、「3時間目 テロ（暴力）は許されるか」、「4時間目 テロのない世界を目指して」の四つのテーマを掲げて実施した。

第1時間目は、アルカイダのニヒリズムテロ、タリバンの攘夷テロ、パレスチナの占領地解放・独立テロの三つのテロを例に、その内容はさまざまであることを学んだ。そしてテロの定義がいかに難しいかを、テロを定義する人の立ち位置すなわち価値観、世界観によって異なるからだということを説明した。一人一人別の世界観を持っていることがテロの定義を難しくしていると同時にテロの原因ともなるのである。

第2時間目は、テロの原因つまり目的は何かを皆で考えた。テロの目的はさまざまだが、はたして死に値するほどの目的があるかどうかを、正義（配分的正義と承認的正義）の実現という視点から考え、議論した。

第3時間目は、はたしてテロという手段が許される場合があるかどうか、目的と手段との関係を功利主義的判断や絶対主義的判断を比較考量しながら考えた。その上でテロの暴力の本質が物理的暴力ではなく、心理的暴力にあることを理解し、非暴力の手段で対立を解決する方法があるかを検討した。

第4時間目は、テロを防ぐにはどうするかを、対処療法ではなく配分的正義、承認的正義の実現によって達成する方法を考えた。最後にテロのない世界を目指して私たちに何ができるかを論議した。そして次のような結論を述べて授業を締めくくった。

私たちはテロという手段を用いなくても言論によって世の中を変えることができる。そのためには自分たちの意見を何の制約も無く言える自由な世界、言論の自由を保証する地球大の民主主義制度を確立することが重要である。

恐らく私の結論は間違っていないだろう。テロの温床は貧困ではない。「専制と隷従、圧迫と偏狭」である。それは中東の春、アラブの民主化運動を見れば明らかである。だからこそ若い世代にはなによりも自由の大切さを知ってほしいと切望して本書を上梓した。私が出会った生徒たちを見る限り、私の希望は決して夢ではないだろう。